

「GLOBE PROJECT」代表
菅原聡



すがわら・そう。1983年8月5日生まれ、27歳。鎌倉RS桐蔭学園高校→早稲田大学第二文学部。宮城県出身の父や伯父の影響で、鎌倉ラグビースクールで小学校5年からラグビーを始める。04年、早稲田大学ラグビー部を2年で辞め、その1年後には世界一周の旅に出る。06年に「GLOBE PROJECT」を立ち上げ、08年に大学卒業後も（株）リクルートに勤務しながら活動を続けている。弟の太志さんは大東文化大学ラグビー部4年生。

「僕の原点はやっぱりラグビーなんです」。その思いが、一目で経験者となる筋肉質の体を突き動かした。

6月26日に行われた東日本大震災復興支援チャリティーマッチ。仙台、古川、石巻と宮城県の3つのスクールに通う中学生17人（コーチや保護者も含め34名）が観戦した。前日は桐蔭学園高校ラグビー部と練習を行い、試合観戦の前には「宮城選抜」として東京や神奈川のスクールと試合し、トライも挙げた。

この観戦ツアーを企画したのは、フットサル大会を運営し、その収益でカンボジアの地雷除去の活動をしている市民団体「GLOBE PROJECT」（NPO申請中）代表の菅原聡さん。4〜6月にかけて東北各県を回った。避難所で何が必要かを調べるボランティアなどを通して、自らの目で見て歩いた被災地は「想像を超えていた」。

気仙沼市や石巻市でサッカー教室を手伝い、名取市の子どもをサッカー日本代表戦に招待した。ただラグビーに耳を傾げることも忘れなかった。津波に道具が流された高校や練習グラウンドが使えないスクールがあった。合同練習があると聞けば、2〜3時間かけて出かけていく子どもたちがいることを知った。

「選手としては3流でしたが、ラグビーを通じて人間的に成長し、仲間大切さ、努力の意義を教わった」。

ラグビーからもらったものは大きく恩返しできないかなと思った」

小学5年から鎌倉RSで競技を始め、高校は桐蔭学園に進学。2年時札幌大学や企業チームでプレーした父が41歳で他界。通夜には90人の部員全員が出席、泣いてくれる友人もいた。「自分にはラグビー部の仲間がいる」。そう強く思えた瞬間だった。

その後は「全国制覇」を狙いラグビーに没頭した。「ウエイトトレーニングの量には自信があった」。春は県で優勝も、花園予選は準決勝で法政二高に8-13と惜敗し、夢は叶わなかった。

一浪の末、早稲田大学の門を叩く。再び仲間とラグビーする生活に憧れた。ただ、同期には矢富勇毅、今村雄太などスター揃いで、「ちょっとモノが違った。自分にはもつと他にやれることがあるのでは」。悩んだ末、2年の春には上井草を後にした。

1年後には大学を休学し、世界一周の旅へ出発する。NGOや国連機関でボランティアをしつつ、東南アジア、欧州、中東、アフリカなどを縦断した。競技者としてあきらめたラグビーは、一時は見るのもつらかったが、イギリス、パリ、ケニアでまた再びボールを手にした。

「やっぱり楽しかった！」
貧困にあえぐアフリカの難民キャンプでの生活を目の当たりし、「人生観が大きく変わった」。村を襲った部

族を殺すことが夢だという元少年兵も「サッカーをしているときが一番幸せ」と笑顔でボールを蹴っていた。

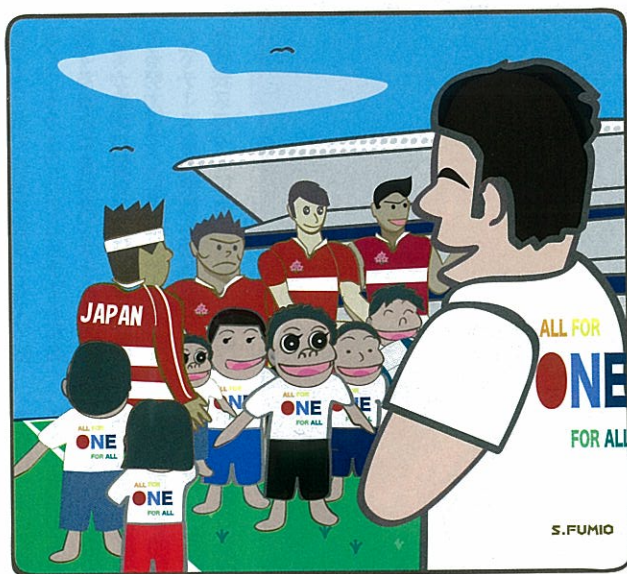
大好きなスポーツを通じて何かできることがあるはず。帰国後の06年に「GLOBE PROJECT」を立ち上げた。現在まで7千人以上がフットサルなどに参加、コート78面分の地雷除去に成功している。ただ頭の中にはいつも「いつか、何か、ラグビーで」。その思いが強くなった結果が今回の行動だった。準備期間は約3週間。岩手、宮城、福島のスクールに通う中学生は約200名。だが今回は宮城県に絞った。

思い、巡って。

ツアー代の合計約70万円。自分が払えるギリギリの額だった。

「ラグビー関係者は本当に温かい人ばかりでした。今回は感謝しても感謝しきれません」

高校の同期やOB会の協力はもちろん、藤原秀之監督も合同練習を快諾。（株）ロソンの玉塚元一副社長は3回分の弁当を提供、日本協会も交通費などを一部負担し、子どもと代表選手と触れ合う機会も作ってくれた。さらに多くの方がネット募金するなど一気に支援の輪が広がった。ツアーに参加した中には家が津波



S.FUMIO

で流され、避難所暮らしの子どももいた。「これからもラグビーを続けたい」「代表選手に会えて嬉しかった」。

その言葉が一番の励みとなった。「今回来られなかった宮城の子、そして岩手や福島の中学生たちも何らかの試合に招待したい」

今後も活動は継続するつもりだ。「やっぱりラグビーから離れることはできませんね」と、まるでスクール時代に戻ったかのように笑った。ただ目の奥には芯の強さを感じる。スポーツ、特にラグビーの持つ力を心から信じている。

TEXT: Kenji SAITO
ILLUSTRATION: Fumio SATOH